

本因坊算砂最大の功績は？

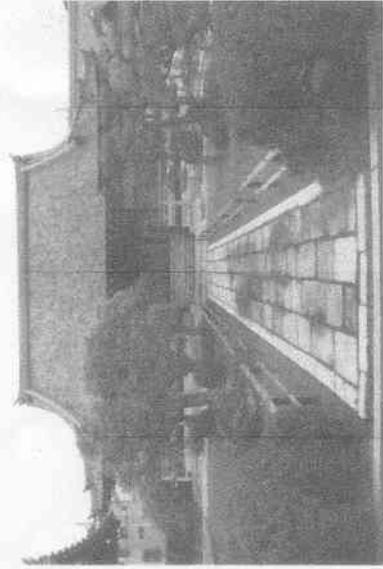
古作 登 (大阪商業大アミュージュメント産業研究所主任研究員)

本欄では、よく知られている囲碁に関する歴史上の人物やできごとを研究者の視点からわかりやすくお伝えする予定です。よろしくお付き合いください。

江戸時代初期、徳川家康により囲碁将棋の家元制度が作られ囲碁界では本因坊家、井上家、安井家、林家の四家が認められ俸禄が支給されるようになった。

当初筆頭格とされた本因坊算砂(1559~1623)は初代名人として大きな影響力を持った。算砂はもともと僧で法名は日海。戦国時代末期に「安土宗論」で有名な法華宗の僧、日淵上人の下で学んでいたが囲碁の才にも恵まれ頭角を現した。日淵の後を継いで京都・寂光寺の住職となり、寺の塔頭・本因坊に住んでいたので、その名を取って本因坊算砂と号したとされる。当初の俸禄は五十石五人扶持。写真は現在の寂光寺(1708年宝永の大火で旧寺は焼失し移設)である。

算砂は家康を筆頭とした有力武家と親密な関係を築き職業としての棋士制度を確立したことも素晴らしいが、最大の功績は「探譜」を定着させ進化の足跡を後世に残したことだろう。ライバルで法華宗本能寺の僧・利玄との対局は日本最古の棋譜(後世の偽作を除く)で現代のブロの目からも見応え十分という。



現在の寂光寺

第1回

善聖寛蓮の故郷を訪ねて

古作 登 (大阪商業大アミュージュメント産業研究所主任研究員)

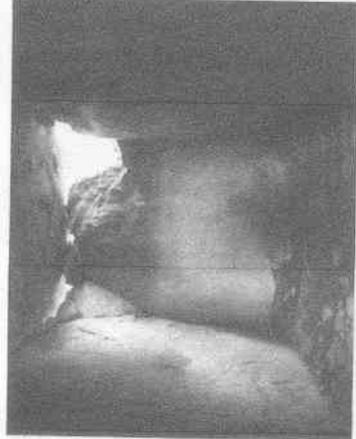
「本因坊」はもともと本因坊家の名跡、「名人」も鎌倉時代以降呼び名が定まったものだが「善聖」の尊称は古く平安時代に存在した。『源氏物語』「手習」の巻に次のような一節がある。

僧都の君、はようよいみじう好ませたまひて、けしうはあらざと思したりしを、いと善聖大徳になりて、さし出てこそ打たざらめ、御碁には負けじかし……(以下略)

ここに登場する善聖大徳は、源氏注釈書によれば平安中期の僧・寛蓮とされる。宇多天皇と醍醐天皇に仕えた碁の名手で『今昔物語集』の、醍醐天皇に二子置かせ金の枕を懸けて打ったエピソードは有名。勅命を受け日本最古の棋書『碁式』を献上した記録も残っている。『碁式』は見つかっていないが、作法や盤の大きさ、布石、攻撃法などを記した鎌倉初期の『囲碁式』(玄尊・著)の基と考えられる。

寛蓮の出身地は肥前国藤津郡大村(現在の佐賀県鹿島市)、都から遠い地方出身者が帝の側近に出世したのはなぜか。筆者は2016年

11月現地を調査した。出家前の名は橋良利。橋氏は平安以前からの地方豪族で朝廷とのつながりも深かったことが史料から読み取れる。寛蓮ゆかりの「橋園」近くには鬼塚と呼ばれる飛鳥の石舞台に似た古墳が存在し、当時の権勢をしのばせる。



6世紀後半のものと考えられる鬼塚古墳